

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム 中世日本漢文班 編

雅楽・声明資料集

第二輯

日本漢文資料 楽書篇

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

- 緒言 磯 水絵
- 古楽文粹 譜序・跋 福島和夫編
- 上野学園大学日本音楽史研究所蔵『鎮守講式』の研究 田中幸江
- 『鎮守講式』影印／『鎮守講式』翻刻・注釈／
- 『鎮守講式』について—根来寺鎮守三部権現の史料としての側面から—／
- 根来寺鎮守三部権現について／
- 成田山弘教図書館蔵『三部大権現託宣御幣切様記』『三部権現託宣大事印信』翻刻・解題
- 大江匡房伝追跡、その恩顧の人々 付、大江匡房音楽関係史料 磯 水絵
- 『明月記』音楽記事年表 五月女肇志
- 狛系楽書群の研究
- 『教訓抄』の研究 教訓抄研究会
- 宮内庁書陵部蔵『教訓抄』翻刻（一）巻一～三
- 曼殊院蔵『教訓抄』翻刻
- 春日大社蔵〔楽記〕について／〔楽記〕翻刻 櫻井利佳・岸川佳恵・神田邦彦・川野辺綾子
- 音楽関係研究ノート
- 『教訓抄』注釈 試行例 《蘇合香》ノート（一） 磯 水絵
- 『源氏物語』音楽表現一覧ノート 磯 水絵

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム事務局

2007 年 3 月

緒言

京都、奈良の各大寺が着々と整備されて、その様相を大きく変化させてきている。薬師寺はすでに伽藍の整備がなったようだ。唐招提寺は間もなくだろうか。その中で特に注目されるのが興福寺で、南円堂が美しい朱塗りの姿を現出したが、これで金堂が完成すると、明治の神仏分離、廃仏毀釈等の号令によって衰微する以前の、豪壮な姿をほんの少し回復することになる。それでも猿沢の池の向こうにまで広がっていた往時の姿には程遠いと言わざるを得ないが、東大寺との力関係が逆転していた中古、中世の様子が、少しは理解されるようになるかと期待される。また、京都宇治の平等院についても、建立当時の様相をCGの再現ヴィデオで垣間見ると、丹と朱色による外観、極彩色の堂内の美しさに目を見張る。ともあれ、京都、奈良の寺社のイメージは、ここ二、三十年を境にして、大きく変貌することになるであろう。それは世界遺産への登録運動と無関係ではないようで、現在の状況の許すところはさらに整備され、そうでないところは、前者とさらなる格差が生まれることになるのかもしれないが、いずれにしろ、無常な、常に変化し続ける世の中が、改めて実感される。

その点においては、この我々の小さな営為も同じようで、こうして21世紀COEプログラムの一環として音楽に関する文献資料を刊行させていただいた結果、その研究は諸方に認められ、学問の分野にようやく市民権を得つつあることを実感している。この営為も三年目を迎え、中世班の研究に携わる若手研究者、大学院生たちも、それぞれ個別研究に積極性を示すようになってきた。頼もしいかぎりであるが、そうしてその研究に際しては、昨年度作成した三冊の資料集がつねに座右にあって効力を発揮している。各人がそれを基礎研究の段階で有用であることを実感しているのがよい。彼等にも研究の基盤作りの重要さが身をもって理解されていると言ってよい。この三冊が、関係諸方においても、大いに利用されることを願ってやまない。

ところで、そこにある資料類は、純正な漢文資料とは言いがたいが、しかし、言い換えるならば、それが日本漢文の常態なのだと言ってもよい。日本人は中国からもたらされたそれを、長い時間をかけて、ついには、現行の文体にまで仕上げてきた。しかし、相変わらず、その変遷史は中世をうまく通過していない。その原因は、この常態の日本漢文と、国語学者が正面から取り組まないことにあるのではないかと筆者には思われる。それが、一方においては、漢文日記や、ここに取り上げる音楽資料類の解釈研究を遅らせてもいる。

国際化の旗印のもとに、外国語や、情報機器操作への習熟は言われるが、根幹にあるべき日本に関わる学問は、相変わらず何かおかしい。本道を外れている。このCOEプログラムに携わり、日々、日本漢文と向き合っているが、ひとたび学部の場合にかえて、文章の音読からさせてみると、古文はともかく、現代文もつまらない。それは日常的に垂れ流されるテレビジョン中の似非アナウンサーを手本にしているのだから止むを得ないといえ、それまでであるが、中学、高校の現場も音読をないがしろにしてきた結果かと推察される。このままでは、日本漢文どころの話ではないのである。本

書の緒言にこうした文章が適當でないことはわかつている。しかし、日本漢文の普及、理解を諸方に求める時、この現状の打開が急務である。事新しい要求をするつもりはない。「読み、書き、話す」の徹底と、歴史教育、日本文化の普及。これを大学教育において始めなければならないのでは、まったく遅いのである。日本語の成り立ち、日本文化の成り立ち、そのところを注意深く教授していけば、日本学は正しい道に戻れるはずである。

さて、本年は筆者がサヴァティカルを取った関係もあって、昨年度の補遺を、という構想で本書の制作は始められた。そこで、特に二冊に分けず、楽書篇としてもるもろを一冊にまとめることにした。そこで、まさにあれもこれも一緒という、言わば、こった煮のような状況になったが、それでも、新規の企画として、上野学園大学日本音楽史研究所長で、本班研究協力者である福島和夫氏より、「古楽文粹 譜序・跋」として、楽書の序跋に関する史料研究をご寄稿いただき、楽書における序跋文の様相を諸方に提示できる運びとなった。また、『教訓抄』の共同研究の一環として、宮内庁書陵部蔵『教訓抄』の翻刻・紹介、併せて狛系楽書群の翻刻・紹介も緒につき、今回は（楽記）の収載が実現した。これらについては、今後、二年間以内に完了する予定である。なお、それにつけては、宮内庁書陵部をはじめ、春日大社等、関係諸方にご協力いただいた。記して感謝の意を表する。特に、春日楽書の調査は、『教訓抄』の研究を開始した院生の希望により実施されたものであるが、その調査希望に快く応じてくださったばかりか、多くの時間を割くばかりか、多大なるご教示をくださった春日大社主任学芸員松村和歌子、同学芸員秋田真吾両氏の厚情は言葉に尽くせない。この二度にわたる春日大社所蔵の楽書の調査によって、『教訓抄』の研究が今後どのように展開していくかは、筆者も楽しみなところである。

中世日本漢文班主任 磯 水絵

平成十九年三月吉日